

生するもあり、野生のだいこんが高平山熔岩臺地に於て、春季數ヶ月に涉り限なく満開するは彼の古來獨特の農業經營たる牧畑と共に、なごやかな光景である。更に島前内海の一部にある別府灣や菱浦等には、天然記念物「くろさづた」の如き熱帶性海藻の分布もある。若し夫れ島後に渡航するならば北端の中村（白島海岸・海苔田鼻等の名勝及天然記念物の所在地）には既に指定された「高尾暖地性植物群落」があり、又板狀流紋岩中の「マール」として、天然記念物に擬する西南海岸「油井池」附近には、自生の水

仙が早くも十一月に花を開くといふ。要は意外に氣候が溫和であり、常に軟風の爽な地域であるから、時に起る日本海の荒い風波と頗微妙な關係ある配合を爲し、豪壯の風景に對して誠に好い内助を爲すものといふべきである。そして幾多の天然記念物を包含し、否寧之れによつて名勝地を形成するの觀あるは、蓋類例の無いことと信ずる。況や岩石地質學的にはアルカリ岩域で、斯の如き雄大な光景を爲すは、事實上日本一品といはねばならぬ。

(結)

一〇、一一、一三

明治初期を中心とした福島縣内の水路交通 (二)

安 田 初 雄

四 主要貨物及其の移動

(1) 貨物の種類 明治十四年十一月の回漕店集

會決議に依ると、阿武隈川下流部では荷物を三類別に分けてゐた。

第七表 第一駄賃運賃表 (明治四十一年協定)

荒濱及浦崎のり運賃								區間
藤波	玉崎	四日市場	下名生	平貫	角田	金森	丸森	川港
一六錢	一八	一九	二一	二二	二九	三五	四一	第一類
四六	三七	三一	四九	四一	三二・五	三八	四六・五	第二類
四二	三四	二九	四二	三六	四四	三六	四〇	第三類

玉崎のり			下名生のり			原町藁のり			區間
金森	丸森	沼上	金森	丸森	沼上	梁川	徳江	中瀬	川港
二九錢	三五	四四	二六	三二	四一	四八	五二	五八	第一類
二七錢	三二	四〇	二四	二九	三七	四四	五〇	五八	第二類
二四錢	三〇	三八	二一	二七	三五	四〇	四六	五二	第三類

第一類 木綿・砂糖・臘・瀬戸物・水油・表類・
 櫃荷・石盤・器械・鐵類・洋箱・五十集類、
 但一駄目方五十二貫以下
 第二類 石油・唐鐵・粕類・板類・材水・竹・
 操綿 但一駄目方四十七貫以下
 第三類 穀物・鹽 但一駄目方四十五貫同以下

以上により日用品は總べて船貨として回漕され
 たことが知れる。阿武隈川上流部では下流部の
 如き資料はないが、米・木綿・鹽・鹽引・砂糖・
 酒・竹材等が主要貨物であつた。阿賀川では米・
 鹽・五十集類で綿は無かつた様である。

第七表運賃表に依つて見ると、貨物の目方に依り、或ひは破損し易きか否かに依り、殊に航路の難易に依つて賃錢が定められた。荒濱沼上間と沼上福島間とを比較すると距離に於いて前者が遠いにかゝはらず、賃錢が安い。更に注意

の運賃			
福	鎌	田	
八	八	七	六
八	八	七	六
		七	二

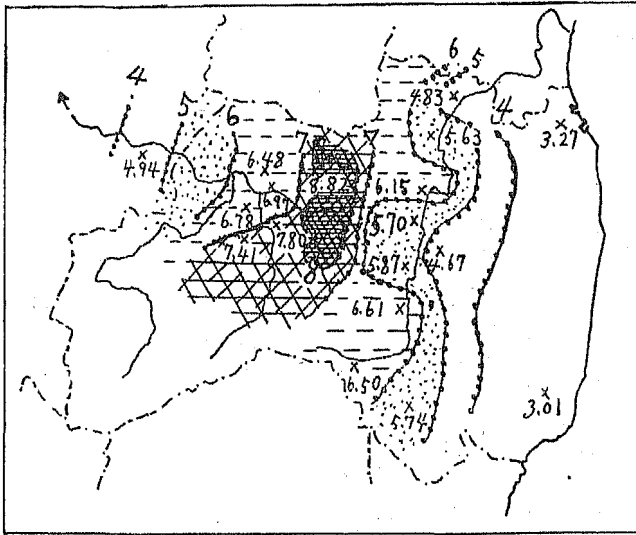
外丸森よりは右運賃六錢減ず、沼上よりは一四錢減ず。

すべきは遡航の賃錢のみ定めて在ること、實に下流部に於ける一般貨物の移動方向は下流から上流へ、云ひ換へれば荒濱で親船から積換へた貨物を角田盆地から、福島盆地へと移入されたのである。下りの貨物は徳川幕府直轄領からの上納米・米澤藩・福島藩・白河藩等の回漕米である。是に反し上流部に於いては平潟港を経て鮫川筋を上り、石川から明岡に出た鹽・鹽引等の貨物と白河を経て陸路北上した綿・砂糖、白河藩の米、附近からの竹材、須賀川の酒等の貨物が總べて下された。二本松から遡航する際には空船なので、舟を曳き上げる舟子は下流部より少しで良かった。此の川谷南北からの貨物移動接觸は安達・信夫兩郡境附近で行はれた。

上流部の米・竹材等は二本松河岸で馬脊に移され陸路福島に出で、再び船積された回漕米は下流部を下された。途中東部に彎曲した不可航區をさけて此の方法が取られた。上流部特に二本松・須賀川間は上川船區よりも平均傾斜は小だが、水量が少い上に、所々早瀬がある（小和瀧等）爲荷積した船を曳き上げるのは容易でなかつたこと、日用品を福島から持つて来るよりは平浮中之作から、阿武隈高原を越えて搬んだ方が格安であること等の爲に此の様な移動方向を取つたのであらう。

阿賀川は阿武隈川下流部と移動方向が似てゐる。即ち鹽、五十集類が上り荷で米が下された。綿荷が中通りの様に入らぬのは、現在でも綿は大麻と共に今津地方で栽培してゐるが、明治初期は自給自足の状態になつた爲である。會津地方では鹽澤、大鹽等で鹽の産出もあつたが、是等岩鹽産出は極少量に過ぎず需要を充すべくも無かつた。阿武隈川谷南北と阿賀川谷との三方

第五圖 各地の鹽一石の價格



明治初期を中心とした福岡縣内の水路交通

から入つた貨物は猪苗代盆地で接觸してゐた。此の状態は鐵道開通前まで繼續してゐた。

数字は円單位

明治十三年の鹽一石の價を分布圖にして見る
 と此の附近が最も高くなつてゐて隔海性を示す^{註九}
 註一、須賀川中宿の船問屋で運漕事務に隨つてゐた關根林之助氏の話。

註二、明治十四年十一月回漕店集會決議。

註三、中川英右・信達二郡村誌 明治三十二年卷十二 一七

一八頁。

註四、平潟港、茨木縣平潟町なり、福岡縣中之作港と共に鐵道開通前は商港として繁盛してゐた。入港貨物、食鹽・鹽魚類最も多し。明治元年村費收入中の鹽役は洗濯屋（娼妓を置く家）に課した税金と共に大部分を占めてゐた。一ヶ年輸入六萬俵と見積られてゐるから（齋田鹽一俵一斗六升入赤穂鹽一俵二斗……質がよくない）九千六百石乃至一萬石に達したものと見られる。

明治十三年福岡縣製鹽高二千二百石に比較すれば如何に多量であつたかが理解出来る。中之作港から入つた鹽の量は見積る資料がないが地鹽よりはるかに多かつたと當時運搬に従事した人が云つてゐた。平潟から主として牛馬脊を利用して茨木縣北部は云ふまでもなく、彌太郎坂を経て棚倉へ小川・田人を経て、井戸澤・黒田・戸草を経て中道地方に鹽及鹽魚が入つたが、その内でも御齋所街道を経て石川に出るものが最もよく利用された様である。中之作からの此處を通つた。もつとも一部は平から夏井川筋小野新町

に出で柳橋に出て中通りに入つた。

平潟村誌 明治一二—二二年迄に書かれたもの。

註五、本文三の註三。

註六、本文一の註一。

註七、明治一三年福島縣統計表 山鹽產地として南會津郡伊

北村鹽澤が擧げてある。開坑明治六年一二月、出来高二・

九石 工人八七〇人、一八三日就業す。大鹽村でもそれ以

前に製鹽を行つた様である。鹽川町の清水河岸の地名を生

ぜしめた清水も鹽分を含んでゐる。他の物資は自給出来た

が鹽に關してはこれ位の産出（殊に大鹽村等は經濟的に引

き合はず休止した位だし清水河岸のは根跡を認める程度で

ある）では自給は不可能である。その爲若松の鶴ヶ城には

莫大な鹽が封鎖された場合の準備として貯藏されてゐた。

註八、前同、阿賀川筋は規則正しく上流へと價格が上昇し一

石八圓八二五となつてゐる。是に反し中通りは二本松の

六圓一五八三が中流地方の高價格地で、その南北に安價な

地方が存するのは既述の如く下流部及上流部から反對方向

に移入せる鹽が此の附近で接觸するからで、若し松川等の

資料でもあつたら更に高價を示すことと思ふ。一般に中通

の形が複雑になつたのは阿武隈高原を越えて、御齋所街道・

小野新町・平街道・川俣浪江街道等により、濱通りから鹽

及海産物が移入された爲である。安達郡北部で相馬鹽と一

般の鹽に代名詞を附してゐるのは相馬郡松川浦附近の鹽が

此處に入つたことを示す。

小野武夫 郷土經濟史研究上の若干法則 郷土科學講座

第一冊 昭和六年九月 一四頁。

註九、猪苗代町に入つた鹽

(1) 東方、中山峠を越えて本宮より入る、俵を青繩で縛る

鹽色白色。

(2) 西方、大寺・磨上・土田・湯達澤を経て、赤繩で縛る、

鹽色淡黒色（越後鹽）（猪苗代町にて聴取）湖の南部へは

勢至堂峠を越えて入つた（長沼町の舊間屋にて聴取）

五 河川交通の盛衰

福島縣河川交通の發達史に關する資料は極め

て不充分である。貨物統計を欠いて居る事、港

別船數統計が二ヶ年分取つて有るのみの事等の

爲論述を進める事は困難である。阿武隈川下流

部に於ては寛文十一年江戸への回漕米運漕の合

理化を命ぜられた河村瑞軒が、阿武隈の川浚を

行つた以前に、桑折代官古河善兵衛が寛永の末

に川浚を行つてゐる。然し其れ以前に航行され

得なかつた確證は何等存しない。

阿武隈川上流部に於いても、徳川時代末期に

通船計劃あり、嘉永五、六年には組合組織のが

（註三）

完成し通船したと云ふが、其れ以前に一切通船しなかつたとは云へないから、今日の所阿武隈川交通發生に關しては、阿賀川の交通が徳川中期に既に行はれてゐて、その起原は大部古いらしい、と云ふのと同様の云ひ方より外にない。維新以後は明治七、八年が最盛期であつたと云ふ事は阿武隈川下流部・上流部・阿賀川等の現

船積高は一船の船積高を表すものかと思ふが明瞭で無い。明治二十年には郡山・福島と東京間の日本鐵道開通し、三十二年郡山・若松間、三十四年喜多方まで岩越鐵道開通する等陸上交通の大變革が起り、爲めに船路は急速に重要性を失つたものの如くである。即ち福島には明治四十年頃貨物船が二隻有つただけで、其れも片手間に運漕する位であつた。明治

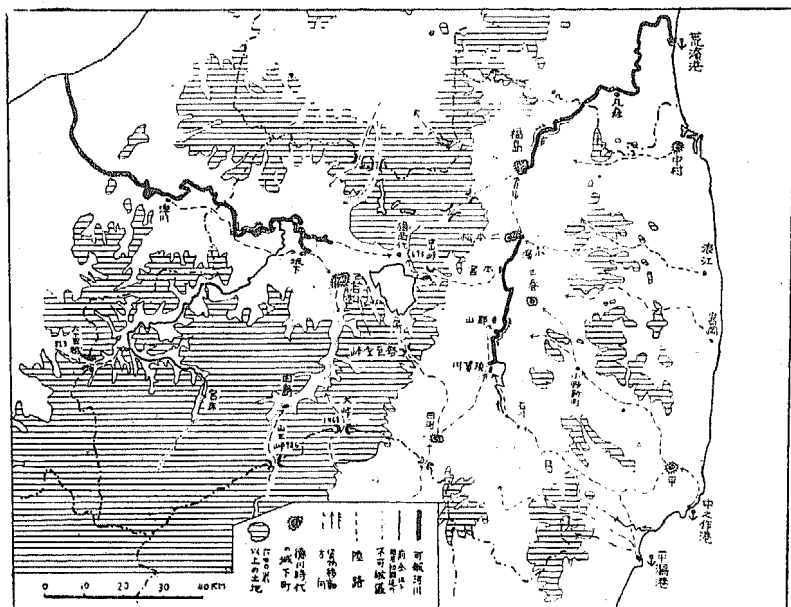
第八表

川名	區	里程	船積高
阿武隈川	岩瀬郡須賀川より	十一里	四〇貫
〃	信夫郡福島町より	九里	一四〇〇貫
堂島川	耶麻郡金橋村より	六里二〇町	六〇〇貫
阿賀川	耶麻郡山都村より	六〇〇貫	六〇〇貫
鶴沼川	坂下町より	一里	一九〇貫
	河沼郡青津村まで		

四十一年迄上下した船も其の後は影を見せなくなつた。かつて蒸氣船が通航して來て沿岸の人達を驚かした事もあつたが、可成り過去の事となつて終つた。阿武隈上流部に於いては明治十五、十六年迄繼續して居た様だが（但し須賀川・二本松間のみ）間もなく廢業した。阿賀川も明治十五、十六年迄商人の船が通航して來たが既に舊觀は失はれてゐた。津川迄は當時でも通航して貨物は此處から陸路坂下方面に搬出された。遷移

地で聽收し得た。明治十二年福島縣統計には傾斜が割合に急だつた明岡・須賀川間・鮫川の船路は記載して無い。是等は明治の極初年に廢止された。明治二十一年後の福島縣統計には第八表の如きが示し有るのみである。此れと同一な表が明治の末までの各統計に記載されてゐる。

第六圖 貨物移動



地球

第二十五卷

第一號

畜

六四

點の多い津川・鹽川間が早く衰へたのは明岡・須賀川間の消息と似てゐる。猪苗代湖の水運は帆船から蒸氣船へと變化し、船着場も明治中期迄には變つたが、現在では遊覽船が往來するだけとなつた。總じて現在船運の便はなくなつた。僅かに材木薪が近い距離で水運を利用し運搬する程度である。もう通船が出来ぬか」と聽くと「昔は水量が多かつた。故に現在では困難だらう。」とは鹽川附近・須賀川・二本松附近等で、雪の量が近來減少したと云ふ事と共に、よく聽かされた言葉である。事實氣候の變化を示すものなら興味ある事である。福島縣の河川航路を觀察追求して、運搬量・交通量等の點から云つて不確實、或ひは割合に少量であつたかも知れぬが、船路・船・港・貨物移動・盛衰等が、距離・川の傾斜・川床狀態・水量等の自然的因子と物資需要・交通機關の變化等の人文的因子とに不可分な關係の有る事を知り得た。

一般の文化景觀が、其の發達の最初の段階から、極大の段階を経て充分に調和的發達を遂げる最後の發達段階に達する迄の變化が、面積的であるに對して、川の船路は是等の變化を線的になした。即ち極大に達した後、水量少く急傾斜な上流は下流より早く衰へた。馬牛脊が荷車馬車に變り、汽車更に自動車の進出に依つて、川船の運搬すべき貨物が無くなつた時に下流部も衰へ、貨物移動方向がまつたく變つて終つた。日本内地の各河川は何れも此の様な變化をなどつた様である。時間的に敏速ではないが、割合に大量の貨重に耐へると云ふ河川航路が將來文化の諸條件の變化に依つて再び利用されると云ふ事が無いものだらうか？

註一、河村瑞軒 奥羽運漕考・奥羽開運日誌。

註二、西白河郡吉子川村川原田から、二本松迄通船の件に關する文書（今泉氏所藏）に依ると、同計劃は増役所に願出しで許可されたが二本松藩との折合ひを悪くして結局計劃中止、明治十一年に入つて山吉盛典福島縣令は猪苗代湖から疏水運河を阿武隈川に通ぜしめ、宮城縣下野蒜港を一貫し

明治初期を中心とした福島縣内の水路交通

た船路を開き得ると信じてゐた。西貞雄 利權中心猪苗代湖々面低下問題の真相 大正十四年 三一頁。

註三、P. E. James, the Blackstone Valley, Ann, Amer. Geogr. 19 (1929) 西水孜郎 文化景の研究 地理學評論

五ノ十一。保柳睦美 景觀の分析 地理學評論 六ノ二。

保柳睦美 河岸耕作景の形態學的研究豫報 地理學評論

六ノ三。宮崎健三 景觀の變遷—例を越中有峯にとりて

地理學評論 一一ノ一。辻村太郎・能登志雄 阿蘇火山東

側裾野の耕作景 地理教育 二二ノ六。

註四、長井政太郎 最上川の水運 地理教育 二十二ノ一及

び二。田中啓爾 本州島内陸部に於ける鐵道開通前の鹽の

移入路 地學雜誌 五一〇。田中啓爾 北上川流域に於ける

鹽及魚の移入路 大塚地理學論文集 三。

六 附 言

此の調査を思ひ立つたのは昭和五年秋田中啓爾助教授が文理大の學生を引率して來福され、一週間の巡檢を終へられて最後に福島・川俣・保原・梁川・貝田・飯坂と自動車にて廻られた際幸ひにも同行を許されて、鹽の移入路や河港に就いて幾分和識を得る事が出來た時であつた。動機がそれであるのみならず、各地の鹽及魚の

移入に關する同助教授の研究は調査進行及整理上の指導書であつた。昭和五年に阿武隈川の梁川・福島間、同六年の秋には下流荒濱方面、同七年は阿武隈川上流部の一部と猪苗代湖、同八年には阿武隈川上流部全部及び阿賀川、同十年鮫川方面と範圍を擴げて見た。然し資料は尙不足してゐるにもかゝらず一應發表したのは將來研究上の大方の教導を得たいが爲めである。

註一、田中啓爾 地理學論文集。

同 近江盆地に於ける鐵道開通前の鹽及魚の移入路に就いて 大塚地理學論文集 四。

新著紹介

○白頭山 京都帝國大學白頭山遠征隊報告

四六倍判一四八頁 寫眞版四〇葉附圖一葉

東京梓書房發兌 十年九月 定價三圓八〇錢

昭和九年十二月から翌十年一月に亙つて京大旅行部員によつて行はれた白頭山冬期旅行はヒマラヤ探檢の豫行に近いものだと云はれたものである。實際耐寒試験か或は自然現象の殆んど窺むつてゐる狀態を賞視するかの以外、學問的探檢の

効果を澤山に獲得することの出来ない冬期積雪の間に於ける旅行であつた。本報告中第一部は隊長今西農學士の白頭山遠征の意義を述べたものと、準備と日誌から成り、日誌の内にはチームウォークが隊員の協同によつて如何にうまく行はれたかを示してゐる。第二部は専門的の報告で氣象・植物生態・動物・醫學的方面及寫眞に就いて述べられてゐる。皆新進學者の記述である爲めかなり理窟つばいのが多い。附録として會計報告以下いろいろあつて、巻尾を飾るものは四十葉の美しい寫眞である。本書は寒中の登山家や、探檢隊組織に當つて參考になる所が多い點で地理學界に紹介して置く價值がある。(S)

○昭和十年 全國市町村別面積調

内閣統計局

四六倍版九七頁 東京統計協會發行 十年十月 定價五五錢

全國と題してはあるがこれは内地の市町村別の面積を方料で示した表である。之と共に府縣別面積と市郡別面積との二表も併せ掲げてある。面積は五萬分ノ一地形圖上で測定したもので未だ地形圖のない小笠原島の南島島と沖繩縣島尻郡の島島とは面積を出してない。朝鮮の各面の面積は夙に計測されてゐたが内地の市町村の面積の表があれば地理學殊に人口の密度などの様な人文現象の密度を出すに都合がよいと思ふたのは久しいことであつたが、此の表を得て日本の地理研究者に一大武器を與へたことになった。なほ從來各府縣や郡市